
太宰治全集

6

筑摩全集類聚

筑摩書房

太宰治全集第六卷
筑摩全集類聚

昭和五十一年五月十日 初版第一刷發行
昭和五十五年一月二十五日 類聚版第二刷發行

著者 太 宰 治

發行者 關 根 榮 郷

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—一九一

電話 東京例七六五一(營業)

東京例六七一一(編集)

振替 東京六一四—二二三

印刷 株式會社精興社
製本 株式會社積信堂

(分類) 0393 (製品) 71906 (出版社) 4604

目次

鐵面皮	三
赤心	一九
右大臣實朝	二
作家の手帖	一八一
佳日	一九〇
散華	二二四
雪の夜の話	二三一
東京だより	二三八
新釋諸國噺	二四三
貧の意地	二四七
大力	二五九
猿塚	二七一
人魚の海	二八〇

破	産	二九六
裸	川	三〇七
義	理	三三八
女	賊	三三九
赤	い太鼓	三三九
粹	人	三五三
遊	興戒	三六五
吉	野山	三七四
竹	青	三八五
解	題	四〇三
校	異	四一一

太宰治全集
第六卷

鐵面皮

鐵面皮

安心し給へ、君の事を書くのではない。このごろ、と言つても去年の秋から「右大臣實朝」といふ三百枚くらゐの見當の小説に取りかかつて、ことしの二月の末に、やつと百五十一枚といふところに漕ぎつけて、疲れて、二、三日、自身に休暇を與へて、さうしてことしの正月に舟橋氏と約束した短篇小説の事などぼんやり考へてゐただけれども、私の生れつきの性質の中には愚直なものもあるらしく、胸の思ひが、どうしても「右大臣實朝」から離れることが出來ず、きれいに氣分を轉換させて別の事を書くなんて鮮やかな藝當はおぼつかなく、あれこれ考へ迷つた末に、やはりこのたびは「右大臣實朝」の事でも書くより他に仕方がない、いや、實朝といふその人に就いては、れいの三百枚くらゐの見當で書くつもりなので、いまは、その三百枚くらゐの見當の「右大臣實朝」といふ私の未完の小説を中心にして三十枚くらゐ何か書かせてもらはう、それより他に仕方がなからうといふ事になつたわけで、さて、それに就いてまたもあれこれ考へてみたら、どうもそれは、自作に對する思はせぶりな宣傳のやうなものになりはしないか、これは誰しも私と同意見に違ひないが、いつたいあの自

作に對してごたごたと手前味噌を並べるのは、ろくでもない自分の容貌をへんに自慢してもつともらしく説明して聞かせてゐるやうな薄氣味の悪い狂態にも似てゐるので、私は、自分の本の「はしがき」にも、または「あとがき」にも、いくら本屋の人からさう書けと命令されても、さすがに自慢は書けず、もともと自分の小説の幼稚にして不手際なものには自分でも呆れてゐるのであるから、いよいよ宣傳などは、思ひも寄らぬ事の筈であるが、けれども、いま自分の書きかけの小説「右大臣實朝」をめぐつて何か話をすすめるといふ事になつたならば、作者の眞意はどうあらうと、結果に於いては、汚い手前味噌になるのではあるまいか、映畫であつたら、まづ豫告篇とでもいつたところか、見え透いてゐますよ、いかに伏目になつて謙讓の美德とやらを裝つて見せても、田舎つべいの圖々しさ、何を言ひ出すのかと思つたら、創作の苦心談だつてさ、苦心談、たまらねえや、あいつこのごろ、まじめになつたんだつてね、金でもたまつたんぢやないか、勉強いたしてゐるさうだ、酒はつまらぬと言つたつてね、口髭をはやしたといふ話を聞いたが、嘘かい、とにかく苦心談とは、恐れいつたよ、謹聴々々、などと腹の蟲が一時に騒ぎ出して來る仕末なので、作者は困惑して、この作品に題して曰く「鐵面皮」。どうせ私は、つらの皮が厚いよ。

鐵面皮、と原稿用紙に大きく書いたら、多少、氣持も落ちついた。子供の頃、私は怪談が好きで、おそろしさの餘りめそめ泣き出してもそれでもその怪談の本を手放さずに讀みつづけて、つひには玩具箱から赤鬼のお面を取り出してそれをかぶつて讀みつづけた事があつたけれど、あの時の氣持と實に似てゐる。あまりの恐怖に、奇妙な倒錯が起つたのである。鐵面皮。このお面をかぶつたら大丈夫、もう、こはいものはない。鐵面皮。つくづくと此の三字を見つめてゐると、とてもこれは堂々た

る磨きに磨いて黒光りを發してゐる鐵假面のやうに思はれて來た。鋼鐵の感じである。男性的だ。ひよつとしたら、鐵面皮といふのは、男の美德なのかも知れない。とにかく、この文字には、いやらしい感じがない。この頑丈の鐵假面をかぶり、ふくみ聲で所謂創作の苦心談をはじめたならば、案外莊重な響きも出て來て、そんなに嘲笑されずにすむかも知れぬ、などと小心翼翼、臆病無類の愚作者は、ひとり淋しくうなづいた。

昭和十一年十月十三日から同年十一月十二日まで、一箇月間、私は暗い病室で毎日泣いて暮してゐた。その一箇月間の日記を、私は小説として或る文藝雜誌に發表した。わがままな形式の作品だったので、編輯者に非常な迷惑をおかけした様子である。HUMAN LOST といふ作品だ。すべて、いまは不吉な敵國の言葉になつたが、パラダイス・ロストをもぢつて、まあ「人間失格」とでもいふやうな氣持でそんな題をつけたのであつて、その日記形式の小説の十一月一日のところ左のやうな文章がある。

實朝をわすれず。

伊豆の海の白く立ち立つ浪がしら。

鹽の花ちる。

うごくすすき。

蜜柑畑。

くるしい時には、かならず實朝を思ひ出す様子であつた。いのちあらば、あの實朝を書いてみたいと思つてゐた。私は生きのびて、ことし三十五になつた。そろそろいい時分だ、なんて書くとき甚だ氣障な空漠たる美辭麗句みたいになつてつまらないが、實朝を書きたいといふのは、たしかに私の少年の頃からの念願であつたやうで、その日頃の願ひが、いまどうやら叶ひさうになつて來たのだから、私もなかなか仕合せな男だ。天神様や觀音様にお禮を申し上げたいところだが、あのお光みつの場合は、ぬかよろこびであつたのだし、あんな事もあるのだから、やつと百五十一枚を書き上げたくらゐで、氣もいそいその馬鹿騒ぎは慎しまなければならぬ。大事なのは、これからだ。この短篇小説を書き上げると、またすぐ重い鞆をさげて旅行に出て、あの仕事をつづけるのだ。なんて、やつぱり、小學生が遠足に出かける時みたいな、はしやいだ調子の文章になつてしまつたが、仕事が楽しいといふ時期は一生に、さう度々あるわけでもないらしいから、こんな浮はつた文章も、記念として、消さずにそのまま残して置かう。

右大臣實朝。

承元二年戊辰。二月小。三日、癸卯、晴、鶴岳宮の御神樂例の如し、將軍家御疱瘡に依りて御出無し、前大膳大夫廣元朝臣御使として神拜す、又御臺所御參宮。十日、庚戌、將軍家御疱瘡、頗る心神を惱ましめ給ふ、之に依つて近國の御家人等群參す。廿九日、己巳、

雨降る、將軍家御平癒の間、御沐浴有り。(吾妻鏡。以下同斷)

おたづねの鎌倉右大臣さまに就いて、それでは私の見たところ聞いたところ、つとめて虚飾を避けてありのまま、あなたにお知らせ申し上げます。

といふのが開卷第一頁だ。どうも、自分の文章を自分で引用するといふのは、グロテスクなもので、また、その自分の文章たるや、かうして書き寫してみると、いかにも青臭く衒氣満々のものやうな氣がして來て、全く、たまらないのであるが、そこがれいの鐵面皮だ、酒啞々々然と書きすすめる。ひよつとしたら、この鐵面皮、ほんものかも知れない。もともと藝術家つてのは厚顔無恥の氣障つたらしいもので、漱石がいいとしをして口髭をひねりながら、我輩は猫である、名前はまだ無い、なんて眞顔で書いてゐるのだから、他は推して知るべしだ。所詮、まともではない。賢者は、この道を避けて通る。ついでながら徒然草に、馬鹿の眞似をする奴は馬鹿である。氣違ひの眞似だと言つて電柱によぢのぼつたりする奴は氣違ひである、聖人賢者の眞似をして、したり顔に腕組みなんかしてゐる奴は、やつぱり本當の聖人賢者である、なんて、いやな事が書かれてあつたが、浮氣の眞似をする奴は、やつぱり浮氣、奇妙に學者ぶる奴は、やつぱり本當の學者、酒亂の眞似をする奴は、まさしく本物の酒亂、藝術家ぶる奴は、本當の藝術家、大石良雄の酔狂振りも、あれは本物、また、笑ひながら嚴肅の事を語れと教へる哲人ニイチエ氏も、笑ひながら、とはなんだ、そんな冗談めかしたりして物を言ふ奴は、やつぱり、ふざけた奴なんだ、といふ事になつて、鐵面皮を裝ふ愚作者は、なんの事はない、そのとほり鐵面皮の愚作者なのだ。まことに、身も蓋も無い興覺めた話で、まるで赤はだかにされたやうな氣持であるが、けれども、これは、あなどるべからざる説である。この説に就いては、なほ長年月をかけて考へてみたいと思つてゐるが、小説家といふものは恥知らずの愚者だといふ事だ

けは、考へるまでもなく、まづ決定的なものらしい。昨年暮に故郷の老母が死んだので、私は十年振りに歸郷して、その時、故郷の長兄に、死ぬまで駄目だと思へ、と大聲叱咤されて、一つ、ものを覺えた次第であるが、

「兄さん、」と私はいやになれなれしく、「僕はいまは、まるで、てんで駄目だけれども、でも、もう五年、いや十年かな、十年くらゐ経つたら何か一つ兄さんに、うむと首肯させるくらゐのものが書けるやうな氣がするんだけど。」

兄は眼を丸くして、

「お前は、よその人にもそんなばかな事を言つてゐるのか。よしてくれよ。いい恥さらした。一生お前は駄目なんだ。どうしたつて駄目なんだ。五年？ 十年？ 俺にうむと言はせたいなんて、やめろ、やめろ、お前はまあ、なんといふ馬鹿な事を考へてゐるんだ。死ぬまで駄目さ。きまつてゐるんだ。よく覺えて置けよ。」

「だつて、」何が、だつてだ、そんなに強く叱咤されても、一向に感じないみたいにニタニタと醜怪に笑つて、さながら、蹴られた足にまたも縋りつく婦女子の如く、「それでは希望が無くなりますもの。」男だか女だか、わかりやしない。「いつたい私は、どうしたらいいのかなあ。」いつか水上温泉で田舎まはりの寶船園とかいふ一座の芝居を見たことがあるけれど、その時、額のあくまでも狭い色男が、舞臺の端にうなだれて立つて、いつたい私は、どうしたらいいのかなあ、と言つた。それは「血染の名目」といふひどく無理な題目の芝居であつた。

兄も呆れて、うんざりして來たらしく、

「それは、何も書かない事です。なんにも書くな。以上、終り。」と言って座を立つてしまった。

けれどもこの時の兄の叱咤は、非常に役に立つた。眼界が、ひらけた。何百年、何千年経つても不滅の名を歴史に残してゐるほどの人物は、私たちには容易に推量できないくらゐに、けたはづれの神品に違ひない。羽左衛門の義經を見てやさしい色白の義經を胸に畫いてみたり、阪東妻三郎が扮するところの織田信長を見て、その胸間聲に壓倒され、まさに信長とはかくの如きものかと、まさか、でも、それはあり得る事かも知れない。歴史小説といふものが、この頃おそろしく流行して來たやうだが、こころみにその二、三の内容をちらと拜見したら、驚くべし、れいの羽左、阪妻が、ここを先途と活躍してゐた。羽左、阪妻の活躍は、見た眼にも綺麗で、まあ新講談と思へば、講談の奇想天外にはまた捨てがたいところもあるのだから、楽しく讀めることもあるけれど、あの、深刻さうな、人間味を持たせるとかいつて、楠木正成が、むやみ矢鱈に、淋しい、と言つたり、御前會議が、まるで同人類誌の合評會の如く、ただ、わあわあ騒いで怨んだり憎んだり、もつぱら作者自身のけちな日常生活からのみ推して加藤清正や小西行長を書くのだから、實に心細い英雄豪傑ばかりで、加藤君も小西君も、運動選手の如くはしゃいで、さうして夜になると淋しいと言つたりするやうな歴史小説は、それが滑稽小説、あるひは諷刺小説のつもりだつたら、また違つた面白味もあるのだが、當の作者は異様に氣張つて、深刻のつもりでゐるのだから、讀むほうでは、すつかりまごついてしまふのである。どうもあれは、趣向としても、わるい趣向だ。歴史の大人物と作者との差を千里萬里も引き離さなければいけないのではなからうか、と私はかねがね思つてゐたところに、兄の叱咤だ。千里萬里もまだ足りなかつた。白虎とてんたう蟲。いや、龍とぼうふら。くらべものにも何もなりやしない

のだ。こんど徳川家康と一つ取つ組んでみようと思ふ、なんて大それた事を言つてゐた大衆作家もあつたやうだが、何を言つてゐるのだ、どだい取組みにも何もなりやしない、身のほどを知れ、身のほどを、死ぬまで駄目さ、きまつてゐるんだ、よく覺えて置き、と兄の口眞似をして、ちつとも實體の無い大衆作家なんかを持出してそいつを叱りつけて、ひそかに溜飲をさげてゐるんだから私といふ三十五歳の男は、いよいよ日本一の大馬鹿ときまつた。

(前略)あのお方の御環境から推測して、厭世だの自暴自棄だの或ひは深い諦観だのとなつたり顔して嘯いてゐたひともありましたが、私の眼には、あのお方はいつもゆつたりしてゐて、のんきさうに見える。大聲擧げてお笑ひになる事もございました。その環境から推して、さぞお苦しいだらうと同情しても、その御當人は案外あかるい氣持で生きてゐるのを見て驚く事は此の世にまゝある例だと思ひます。だいいちあのお方の御日常だつて、私たちがお傍から見決してそんな暗い、うつたうしいものではございませんでした。私が御所へあがつたのは私の十二歳のお正月で、問註所の入道さまの名越のお家が焼けたのは正月の十六日、私はその三日あとに父に連れられ御所へあがつて將軍家のお傍の御用を勤めるやうになつたのですが、あの時の火事で入道さまが將軍家よりおあづかりの貴い御文籍も何もかもすつかり灰にしてしまつたとかで、御所へ参りましても、まるでもう呆けたやうになつて、ただ、だからだと涙を流すばかりで、私はその様を見て、笑ひを制する事が出来ず、ついクスクスと笑つてしまつて、はつと氣を取り直して御奥の將軍家のお顔を伺ひ見ましたら、あのお方も、私のはうをちらと御らんになつてニツコリお笑ひになりました。たいせつのお文籍をたくさん焼かれても、なんのくつたくも無げに、私と一緒に入道さまの御愁歎をむしろ興がつておいでのその御様子

が、私には神さまみたいに尊く有難く、ああもうこのお方のお傍から死んでも離れまいと思ひました。どうしたつて私たちとは天地の違ひがございます。全然、別種のお生れつきなのです。わが貧しい凡俗の胸を尺度にして、あのお方の事をあれこれ、推し測つてみたりするのは、とんでもない間違ひのもつてでございます。人間はみな同じものだなんて、なんといふ淺はかなひとりよがりの考へ方か、本當に腹が立ちます。それは、あのお方が十七歳になられたばかりの頃の事だつたのですが、おからだも充分に大きく、少し、伏目になつてゆつたりとお坐りになつて居られるお姿は、御所のどんな御老人よりも分別ありげに、おとなびて、たのもしく見えました。

老イヌレバ年ノ暮ユクタビゴトニ我身ヒトツト思ホユル哉

その頃もう、こんな和歌さへおつくりになつて居られたくらゐで、お生れつきとは言へ、私たちに、ただ不思議と申し上げるより他に術はありませんでした。(後略)

あまり拔書きすると、出版元から叱られるかも知れない。この作品は三百枚くらゐで完成する筈であるが、雑誌に分載するやうな事はせず、いきなり單行本として或る出版社から發賣される事になつてゐるので、すでに少からぬ金額の前借もしてしまつてゐるのであるから、この原稿は、もはや私のものではないのだ。けれども、三百枚の中から五、六枚くらゐ拔書きしても、そんなに重い罪にはなるまいと考へられる。他の雑誌に分載されるのだつたら、こんな拔書きは許すべからざる犯罪にきまつてゐるが、三百枚いちどに單行本として出版するんだから、まあ、五、六枚のところは、笑許、なつて言葉はない、御寛恕を乞ふ次第だ。どうせ映畫の豫告篇、結果に於いては、宣傳みたいな事になつてしまふのだから、出版元も大目に見てくれるにきまつてゐると思はれる、などといふの小心翼々、